

福島大学附属図書館
大塚久雄文庫開設記念講演会

大塚久雄の人と学問

講師

関口尚志氏

(東京大学名誉教授)



2003.3

福島大学附属図書館

大塚久雄文庫開設記念講演会

.....

<日時・場所>

日 時：平成14年1月25日 13時30分～16時

場 所：福島大学 共通講義棟 M棟 2F 22番教室

.....

<式 次 第>

(司会：伊藤宏之教育学部教授)

1. 開会あいさつ 箱木禮子附属図書館長 1
2. 学長あいさつ 吉原泰助学長 2
3. 「大塚久雄文庫」概要紹介 菊池壮蔵経済学部教授 4
4. 講 演 11

講師紹介 富澤克美経済学部教授(8)

演 題 「大塚久雄の人と学問」

講 師 関口 尚志^{よしゆき}氏(フェリス女学院大学国際交流学部教授、東京大学名誉教授)

.....

開会あいさつ

箱木禮子附属図書館長

附属図書館長の箱木でございます。一言ごあいさつ申し上げます。

本日は、大塚久雄文庫開設記念行事に多数ご来場いただきまして、まことにありがとうございます。特にはるばる遠方からお越しくださいました大塚久雄先生ご遺族はじめ、ゆかりの方々、また本日ご講演をいただきます関口尚志先生には心より御礼を申し上げます。

「大塚久雄文庫」というのは、東京大学名誉教授であられました大塚久雄先生の蔵書約6,000冊と雑誌、資料、ノート、テープ、手紙類などを一つの文庫として特別の部屋に保存しまして、整理・分類して目録を作成したものであります。この「文庫」という扱いなんですけれども、図書館では特別のものであります。通常、本などは受入しまして、それを整理・分類いたしまして、ほかの本といっしょに図書館の書庫に並べて置かれるものなのであります。この「大塚文庫」というのはそういう扱いではなくて、文庫としてまとめて特別の部屋に保管して、目録も特別に作成されております。「大塚文庫」というのは、それほど価値があるということでございます。このことにつきましては、後ほどお話があらうかと思えます。

「文庫」がこのような形で完成するということにつきましては、関係者の方々の並々ならぬご協力がございました。特に大塚先生のご遺族からは、ひとかたならぬご援助をいただいております。こうした助けなしにはこの「文庫」は完成し得なかつたのでありまして、この場をお借りしまして心より御礼を申し上げます。

大塚先生の蔵書が図書館に届きましたのは1997年、平成9年の4月18日のことであります。当時の図書館長でありました渡辺義夫先生はさっそく「文庫創設協力委員会」という委員会を立ち上げまして、文庫の整理の方針を検討したうえで、現在見られるような形に「文庫」をもっていくことを決定したわけであります。「文庫」の整理はその後大変な作業になりました。なにせ大塚先生は大変な勉強家であられたため、めぼしい本にはところ構わずアンダーライン・書き込みがなされております。それを一つずつ確かめては目録に記録するという、気の遠くなるような作業が4年以上続いたわけであります。この間、樋口徹先生、菊池壮蔵先生をはじめとする文庫創設協力委員会の先生方など多くの関係者の方々にご協力をいただきました。こうした経緯をへまして、本日ようやく「大塚久雄文庫」開設の運びとなったわけでございます。図書館としては大任を果たしたという安堵感でいっぱいではありますが、この「文庫」をどのように今後研究に役立てていくかということにつきましては、まだ少し検討課題が残っております。これにつきましても早急に検討し詰めたというふうには思っております。

最後になりますけれども、この図書館長という立場と離れまして一研究者として一言この作業に直接関わった方々に御礼を申したいと思えます。大塚先生の研究の足跡がかくも鮮やかに残ったのは、こういう方々の地味で粘り強い努力があったからであります。非常にありがたく思っております。本当にご苦労さまでした。簡単ではございますが、これをおもちましてごあいさつとさせていただきます。

学長あいさつ

吉原泰助学長

ご紹介いただきました吉原でございます。

まず何よりも、この貴重な「文庫」をご寄贈くださいました大塚久雄先生のご遺族の皆様に対しまして、福島大学を代表して、心から御礼申し上げたいと思います。本日は、先生のお嬢様の高柳佐和子さんに御来駕たまわっております。なお、ご長男の和彦さんには、今日のご都合でご出席出来ないということで、先週「文庫」を訪ねて下さいました。また、今日の記念すべき会に、かくも多くゆかりの方々にお集まりいただき、大塚先生も、さぞかしお喜びのことであろうと思っております。有り難うございます。あわせて、身内のことですが、学内で「文庫」立ち上げの仕事に携わってくれた多くの教職員の諸君の労をも、多としたいと存じます。

さて、公式のあいさつは箱木礼子図書館長が致しますし、「文庫」そのものの内容・意義等に関しては菊池壮蔵さんが話されます。それから、大塚先生の「人と学問」については、関口尚志さんに、お話をお願いしてあります。したがって、私がお話することは残されておりません。そこで、大塚先生の思い出を若干述べさせていただいて、ご挨拶にかえさせていただきたいと思っております。

私は、専攻分野が理論・学史で、先生とは領域が必ずしも一致いたしておりませんが、学部学生時代から土地制度史学会の事務局その他で、親しく警咳に接する機会に恵まれておりました。しかし、本格的に先生の教を仰いだのは、大学院の経済史総論の講義においてです。共同体解体の理論がテーマでした。1957・58年頃のことです。先生は、例によって着物を着て演習室に来られ、そして、当時福島大学に在籍されおそらく内地研究で東大に来ておられた・今日ご出席の諸田実先輩が、先生の講義ノートを代読され、キーワードを板書される。私もは、それを頼りにノートを探る。その後で、大塚先生がお話をされる——といった形式でした。

大変先生はお話がお上手で、松田智雄先生でしたか、小林昇先生でしたかが、何処かに書いておられましたが、話術の修練まで積まれたと仄聞します。まことに、さもありませんといった名講義でした。犬山のモンキーセンターでの猿のビヘイヴィアーなどを例に挙げて所説を説明されますと、門外漢の私なども分かったような気になるといったところがありました。もっとも、それでも、頼り無げな顔をしていたのでしょう。時折、先生から唯ひとり門外漢の出席者であった私に「君、理論家としてどう思うかね」ときかれ、冷や汗をかいたものです。それでも臆せず、＜共同体は、資本主義的生産様式における商品のように、諸生産様式の原基形態たりうるか＞といった生意気なモチーフで、レポートを提出いたしました。提出期限ぎりぎり、当時早稲田界限に住んでいた私は、都電荒川線で西ヶ原の先生のお宅まで、レポートを持参しました。いまは懐かしい思い出です。

このように先生から親しく教を受けた私としては、先生の蔵書が福島大学に入るといことは大変な光栄であり、その記念の会でご挨拶することになるとは、まことに感慨一入のものがああります。ちなみに、本学には、今野源八郎先生の全蔵書が収蔵されています。さらに、横山正彦先生の洋書も収納されています。そうした意味では、先生の御蔵書も寂しくはございません。図書館のなかで、旧知の諸先生と気の置けない論議

に花を咲かせることができますよう。

この蔵書の話が、ヨーマン会(大塚ゼミ同窓会)の毛利健三さんや樋口徹さんを通じて最初に浮上りました時に、福島は、大塚史学の研究者が来訪するのに北限だろうという意味のことを言われました。福島市(信夫山)は柚子の北限の地であるということで有名なのですが、今後、大塚史学研究の北限としての榮譽をも担うことになったわけです。その折、ご相談を受け、先生に学ぶところ多かつたものとして、二つ返事でお引き受けしようとお応えしたのですが、皆さんのお骨折りで、本日、ついに「文庫」開設の運びとなりました。心から嬉しく思う次第です。

実は、全くの私ごとで恐縮ですが、私は、明日、最終講義にあたる退官記念講演をすることになっております。どうも関係者の皆さんが、お前が辞める花道に大塚先生の「文庫」の開設式をあててやろうとお考え下さって、今日の日程を組んでくれたようです。だから、私は、最後まで大塚先生の学恩に浴しているわけでございます。

本当に、大塚文庫をご寄贈くださいますて、ご遺族ならびにヨーマン会の皆さんには御礼の申し上げようもございません。有難うございます。終わりに、今後、この「文庫」が十二分に活用されて、歴史学はもとより、社会科学の発展に大いに寄与する結果となることを切に祈って、ご挨拶とさせていただきます。

「大塚久雄文庫」概要紹介

菊池壮蔵経済学部教授

ご紹介いただきました菊池でございます。「大塚文庫」の概要を話せということを仰せつかったわけですが、お手元にパンフレットがございます。そのパンフレットの1ページ目を開いたところの下の方に書籍、それから雑誌類、抜刷、個人資料等々とそれぞれ分けた冊・点数が記載されておると思っています。「文庫」の中の構成については、おおよそそういう数字であるということです。これに関する詳細な目録なんですけど、実は図書館用に、つまり全国の図書館用に目録は作成いたしましたけど、なにしろ費用がかかりますので250部限定の印刷ということで、全国の国立大学の図書館並びに一部私立大学の経済学部のある図書館等には配布いたしますが、ほとんど余裕がございません。そして今日配付いたしました資料の中にコピーが入っておると思うんですが、インターネットの中から福島大学の図書館にアクセスしていただくと、いわゆるWebといいますか、ホームページ上から目録の全部がそのまま同一の検索といいますか、表示できるようにシステムを作りました。ですから、どうしても目録が必要だというお電話をしばしばいただくのですが、インターネットでアクセスしていただければそのままご自宅でも印刷できるという仕組みにいたしましたので、このところをよろしくご理解いただきたいと思っております。

「大塚文庫」が福島大学にやってくるにあたっての経緯、それから、それについての意義などについては、これもまた樋口先生のお許しをいただいて福島大学附属図書館で出しております広報紙にそのいきさつなどについて樋口先生がお書きになった文章のコピーが入っておりますので、それをご参照ください。

概要ということでお話するわけですが、実は個人文庫というのは図書館にとってはなかなか一筋縄ではいかないものであるということをご紹介させていただきます。というのは、蔵書の内容というのは図書館にとっては書籍のレベルで見れば、非常に重要なポイントであることは間違いないわけです。そして例えば、なかなか手に入りにくい本がコレクションされていて、そういう本を図書館が受け入れるというのは図書館の奥行きが深まるということですから、これは非常に有り難いことなんです。ところが、そういう形の文庫というのは全国にはいくつもあります。例えば非常に有名な蔵書家として、とんでもない分量の珍しい本を集めた明治初期といいますか、例えば東北大学には狩野文庫という和書が中心なんですけどございます。それは5万5,000点余りで、例えばジョン・ステュアート・ミルの翻訳を日本で最初に手掛けた人が手書きで書いた和綴の本というものまで入っているわけですね。そういうものは非常に珍しい本ということで、図書館にとっては大事なわけです。そのほかに例えば小樽のシエル文庫など有名な文庫はたくさんあるわけです。これがひとつ貴重な本を蔵書として持っていたものが寄贈されている、そういう文庫というのがあります。

それから、もう一つは持っていた人が問題になる。典型的なのは東京大学が持っているアダム・スミス文庫というのがあります。これは経済学の祖であるところのアダム・スミスが生前に持っていた本、これを東京大学が譲り受けて、戦災のときに疎開するなどして非常に大変だったらしいのですが、アダム・スミスがこういう本を持っていたという非常にその意味で重要な文庫というのがあります。それはアダム・スミスが学問形

成をしていくうえでどういう本を参照したんだろうかということを探るうえでは重要だと、そういう位置づけです。ところが、実際、受入・整理の中で個人文庫というのを位置づけようとしたときに、大塚先生の文庫、蔵書というのは一見したところそれほど珍しい本がたくさんあるという構成・内容ではないのです。それで実際に一つひとつ樋口先生が本当に丁寧に1ページ1ページめくってご確認いただいたんですが、一度も開けたことのないような本、つまりきれいな本が非常に多いのです。というのはどういうことかといいますと、実は個人的な事情で申し訳ないのですが、晩年の一時期に私は大塚先生のお隣に2年半ほど住んでいたことがあるんですが、毎日のように献本が届くんです。そう言うのは失礼なんです、奥様が、「本が集まって集まって置き場がない」といつもおっしゃっていました。恐らく積み上げられていったそういう本は、直接大塚先生が読んで、そこからインスピレーションを抱いて何かをつくるための肥やしになったというものではないと思うんですね。そういう本がかなりあるわけです。じゃあ、そういう本は「大塚久雄文庫」にとってほとんど意味がない本かということ、多分そうではないだろう。そういう本が実は非常にたくさんあるのですが、かつて社会科学の方法などで大塚先生が有名な比喩として社会科学のさまざまな視覚ということをおっしゃっていて、富士山を見るときに見る角度と場所によって、それから季節と時刻によってさまざまな富士山が見えるんだと、つまり富士山というのは1ヶ所から見てこれが富士山の理想的な姿だといっているのでは富士山は分からないということを常々おっしゃっていました。つまり文庫の構成というのも、一見すると大塚先生が使ったことのない本だから意味がないじゃないかといわれるかもしれませんが、そこには何らかのつながりがあって大塚さんに送ろうと思った人たちの意志が入っているわけです。そうすると大塚先生がどういう人たちに影響を与えていたかという範囲がそれによって逆に透けて見える可能性があるわけですね。ですから、そこに数百点の抜刷があるわけですが、抜刷というのなかなか整理が大変で、ここにおられる先生方の名前の入っている抜刷は結構バラバラとあります。手紙が挟まっていたりというのがありますが、そういう抜刷のようなものは、どういう師弟関係若しくは間接、直接に影響を受けた人たちが大塚さんと関わっているのかということがそこから分かる。つまり大塚久雄個人の問題ではなくて、大塚を取り巻く範囲が分かるということがその資料としては非常に重要になってくるわけですね。こういうふうなさまざまな視覚から「大塚文庫」というものを見ていったときには、先に申しましたように本それ自体の貴重さ、それからその蔵書の大きさという価値ではなくて、もっと違ったさまざまな見方のできる「文庫」だと思っただきたいと思うわけです。

それから、もう1つの重要な「大塚文庫」の柱なんですが、これは点数としてはそれほど多くないかもしれませんが。確かに東北大学に夏目漱石文庫というのがあって、それは夏目漱石の書いた色紙の絵みたいなものが全部入っているんですが、それほどではないですが、この文庫の最大の呼び物といいますか重要なポイントは、大塚先生が丹念に丹念に読まれた本、その数は多くはないのですが、書き込みをしている、アンダーラインを引いている、しかもその書き込みアンダーラインが何度も何度もやられているというその跡が見えるということなんです。これは色を変えたり筆跡が違うのでこれは読み返したということが明らかに分かるような、そういうものとして本が貯蔵されている。

これは実は図書館にとっては非常に矛盾に満ちた受け入れと申しますか、利用形態になる可能性があるのです。これはどういうことかと言いますと、通常の図書館は貴重な本とか珍しい本とかは、それを利用する人たちにとって本に書かれてある中身が問題なわけです。ところが、「大塚文庫」に所蔵されている大塚先生の書き込みがある本は、本の中身は、それはどこの図書館でも見られるわけです。ところが、大塚個人が書き込んだという意味は通常の図書館からいうと落書きなんですね。つまり通常の図書館の蔵書にアンダーラインを引いてあったら、これは汚損された本ということになります。それから壊れてしまった本、これは破壊された本ですから買い換えないといけないというものなわけです。図書館の基本的なサービス業務はそういう業務なんです。そういう中に書き込んである本が、あるいは本の中に何かはさめられている本、手紙とかメモとかがそういうものが挟んである本というのは、実は本来の図書館学上の整理分類の仕方からいうと外れるんです。これを図書館が引き受けたというのは非常に重要なことであります。これは恐らくヨーロッパやアメリカの世界であれば文書館、つまりアーカイブスというのがあるんですが、これは本そのものというよりは個人資料、歴史資料というものを出所原則を基として、つまり図書館の分類番号で整理するのではなくて、利用に供するという形態なのですが、そういうものから外れるわけです。ですから、そういう点では今後の利用の仕方についてやはり一定のますます工夫が必要になってくることは明らかです。ここがちょっとむずかしいところだと思うんです。ですから、今後とも形式的には本来の図書館の業務から外れるけれども、だからといって捨てるわけにはいかない貴重な存在を整理・利用していくための知恵も多分拝借せざるを得なくなってくるだろうと考えております。

中身について「文庫」の目玉と申しますか、ポイントはいったいどういうところにあるかということについての私見と申しますか、見解を述べさせていただいたのですが、せっかくですから大塚さんの中身と申しますか、人と業績については関口先生がこれらご紹介されるわけですが、私の個人的な印象で申しますと、大塚先生をはじめとするあの時代の戦中をくぐり抜けたあの世代の学問は、実は非常に長い日本の歴史の中で例えば江戸時代の儒学もそうなんですが、外から最先端の学問を輸入してきて、それを国内で販売するという生業、つまり日本独自のものではなくて、何かよそにより新しいものがあって、それを次々と時代が変わるごとに上着を着替えるように脱ぎ変えてきた、そういう学問的な伝統が非常に強いこの日本の風土の中で、明らかにオリジナルは確かに外国にあったかもしれないけれども、対象が外国であったかもしれないけれども、自前で自分の頭で考えて日本独自の社会科学といえるものをつくらうと努力された。ぼくはある程度世界に誇れるもののような気がするのですが、そういう大塚の日本における学問形成の苦闘の跡をここからうかがい知るといことは非常に重要なことだろうと思うのです。没後5年ですが、最近、大塚はもう既に「戦後啓蒙」というような言い方もされることもあります。が、「もう古い」とこれからはもっと別の社会科学が必要だという批判がしばしば出てまいります。最先端の学問はこうだといって大塚学問そのものを古い上着のように脱ぎ捨ててしまうのでは、大塚が目指していたはずの次々と学問を着せ替えの上着のように着ては脱ぎ、着ては脱ぎしているのではないやり方、その学問そのものが上着のように着古されて脱ぎ捨てられてしまうというのは、あまりにも大塚の

目指していたものと違うのではないか。そこはもう一度本居宣長までさかのぼる必要はないかもしれませんが、戦中から戦後についての一時期、希有な例として日本に存在した日本の社会科学の非常に典型的な例として大塚の研究が、それ自体日本社会科学の一つの研究対象として深められていくことを希望したいと思っているわけです。個人的なお話もこれを機会に交せていただきましたが、以上で大塚文庫についての概要の話とさせていただきます。

講演

演題 「大塚久雄の人と学問」

講師 関口尚志^{しゆき}氏(フェリス女学院大学国際交流学部教授、東京大学名誉教授)

それでは、記念講演会に移ります。

講演会の進行は、本学経済学部富澤教授にお願いいたします。

講師紹介 富澤克美経済学部教授

富澤でございます。進行というよりも、関口尚志先生の紹介をすることが私の役目です。なぜ私が関口先生を紹介するということになったかといいますと、関口先生は私の大学院時代の恩師でもございます。それで「お前やれ」ということになったのではないかと思うのですが、実はこれが私にとっては大変苦しい役割なんです。と申しますのも、私は関口先生にとっては学問的には非常に不肖な弟子でございまして、当時から逃げ回ってばかりおりましたので、ただただ恥じ入るばかりです。こういう役回りをしなければならなくなったということに対して苦しい思いしております。たくさん学生諸君らも見えておりますので一言言っておきますが、少なくともゼミの勉強はサボらずにきちんと勉強してください。そうでないと、いざというときに現在の私のように恥をかくことになります。私を「他山の石」とするようになっていただきたいと思います。

関口尚志先生のご紹介をさせていただきます。先生は1932年のお生まれでいらっしゃいます。1955年に東京大学経済学部をご卒業になり、その後5年間の大学院時代、2年間の助手時代を経まして1962年の4月に大塚久雄先生の後継者として東京大学経済学部西洋経済史担当の助教授に就任され、研究者、教育者としての人生をスタートさせております。1975年経済学部教授となり、定年退官されるまで経済学部長、総長特別補佐などの要職を歴任される傍ら、社会経済史学会の代表理事をはじめさまざまな形で学界や社会的活動にも貢献いたしております。1993年に東京大学を定年退官されまして、その後横浜国立大学を経て現在もおフェリス女学院大学国際交流学部教授としてご活躍中です。さらに現在、日本学術会議会員のほか多くの社会的活動に従事される一方、国内はもとより海外での学術講演も精力的にこなされ、大変お忙しい毎日を過ごしておられます。

ひとわりはこのようなご紹介になると思うのですが、次に簡単に大塚先生との関係という観点からご紹介させていただきます。先生が学部の大塚ゼミに参加されたのが恐らく1953年あたりのことであろうと推測されますが、そのときから東大の経済学部の教授となられる1975年までのおよそ20年間で先生にとって新進気鋭の研究者として、ご自分の研究のベースメントを形成された時代でありました。そしてまさしくこの時期こそ大塚先生が高橋幸八郎先生、松田智雄先生と共にリードいたしました経済史研究を集大成された時期でもあります。つまりこの2つの時期が重なり合っているわけですね。

「近代化の諸問題」と題します論文の中で先生は『西洋経済史講座』(1960-70)、及び『大塚久雄著作集』(1969-70)の刊行をエポックメイキングな出来事として評価され、これによって「しばしば比較経済史学あるいは大塚史学と言われ、戦前・戦中の暗い谷

間にその骨格を形成してきた我が国土着の経済史研究がここに一応の集大成を見たものといえよう」と述べておられます。本日もたくさんヨーマン会の皆様たちがここにおいでですけれども、その当時の大塚ゼミがいかに学問的に高揚した雰囲気にも包まれており、いかにきびしい学問的営為の場として互いに切磋琢磨し合っていたかにつきましても、樋口さんから何度となく伺っております。そして、その中から関口先生をはじめ、たくさんの著名な研究者が輩出されました。しかし、大塚先生のような学問的巨人を恩師に持つとき、弟子といたしましては恩師から何を継承し、また何を独自のものとして付け加えることができるのかという課題にとりわけ苦しむざるを得ません。そして関口先生はまさに「大塚史学」の誕生を最も身近な弟子の1人として共有され、その苦しみに耐えたのでした。更に、その後「大塚史学」をいかにして批判的に継承するかという問題に、だれよりも真摯に取り組んでこられました。そうした学問的葛藤の中から、先生は産業革命期のイギリス金融史研究の第一人者として開拓的業績を次々と発表され、今日に至っております。また最近では、これまたICUの大塚ゼミの卒業生でつくるフライデーの会というものがございしますが、そのフライデーの会のメンバーである梅津順一さんたち若手研究者、と申しましても既に50代を過ぎておりますが、その人たちと四つに組んで、中産層文化の歴史的研究にも携わっていらっしゃいます。

大塚晩年の不肖な弟子ではありますが、同じ悩みを共有する私は、こうした先生の真摯な研究姿勢に勇気づけられもし、また多くを学んでいる一人でございます。本日は学問の継承と発展というのはどのようになされるのかを大塚、関口への継承問題として、あるいはまた一つの事例研究として直接当事者である先生からお話を伺うことができるのではないかと非常に楽しみにいたしております。

力不足ではありましたが、関口先生のご紹介をさせていただきました。

「大塚久雄の人と学問」

講師：関口 尚志^{としゆき}氏

(フェリス女学院大学国際交流学部教授、東京大学名誉教授)

目 次

「大塚史学」の形成と構造	11
『序説』の誕生	
近代化の歴史的起点	
近代化の人間的基礎	
「大塚史学」の現代的意義	12
比較史の意識と方法	
経済大国と談合的文化	
市民社会と現代	
「大塚史学」のエッセンス	14
「最後のエッセンス」は何か	
バブルを拒んだ経営者の魂	
「理念型」的方法とリアルな人間理解	
バラ色の「期待される人間像」を批判	
「悔改め」のテーマと「民主主義の民主化」	
近代化と現代	
— 西欧「近代」の普遍史的意義を「現代」的視点から相対化しつつ解明する — ..	17
二つの合理性の相剋	
南北問題と「Uターンの論理」	
多文化共存の「一般理論」	
経済学の文化的限界	
「日本人の眼」で	
未来社会の設計に向けて	19
近代文化と伝統社会の思惟	
「甘え」の現代化	
「新しい共同体」(アソシエーション)	
無知もまた罪 — 大塚久雄の人と学問 —	20
結び — 要旨 —	21
質疑応答から — 「社会主義」をどうとらえるか —	22
旧社会主義と市民的変革の課題	
アソシエーションと消費者社会主義	

「大塚久雄の人と学問」

講師：関口 尚志氏

(フェリス女学院大学国際交流学部教授、東京大学名誉教授)

ただいまご紹介にあずかりました関口でございます。「大塚久雄の人と学問」というテーマをいただきましてお話しさせていただきます。

大塚先生は5年半前になりますか、1996年の7月に89歳でその生涯を閉じられました。長年、東京大学それから国際基督教大学で教鞭をとられ、研究としては経済史、この分野ではよく「大塚史学」などと言われますが、比較経済史学を確立されました。更に、そうした経済史の新しい分野を切り拓く、あるいは新しい視角を提起するにあたっては社会科学の方法を再考しなくてはならないということで、そうした研究の必要から「社会科学のあり方」、その方法についても優れた業績を重ねられました。研究の成果は『大塚久雄著作集』全13巻として岩波書店から刊行され、集大成されています。そうした業績によって先生は文化勲章を受けられました。経済史が文化として評価されたという意味で、大変お喜びになっていたようにお見受けしました。

「大塚史学」の形成と構造

それにしても『著作集』全13巻、量・質ともに大変なお仕事です。
『序説』の誕生 しかも先生は30歳代半ばに左足を切除されました。そして40歳代の初めには左の肺をほとんど切除するという大手術を受けています。「大塚史学」形成の道標ともいべき『近代欧洲経済史序説』、これは敗戦の前年1944年に刊行されていますけれども、戦争末期、大変不自由なときに病床にあって、先生は「何とか書き残しておきたい」ということで「毎日原稿用紙一枚ずつ」「力を振り絞って書上げた」と述懐しておられます。私が本郷に進学して先生のゼミに加えていただいたのが1953年ですが、昨日のこのように目に浮かぶのですけれども、ゼミはまだ千駄木町のお宅で行われていました。先生のベッドサイドの壁には松葉杖が掛けてある、そういう中で毎週その病床の先生が展開される学問の世界に圧倒されて、本当に頭の芯からへトヘトに疲れたような思いで帰途についたことでした。生涯、先生は想像を絶する肉体のハンディキャップを負いながら、しかし超人的な精神力、禁欲的な生活態度で、余人が遠く及ばない大きな業績を残されたと思います。

近代化の歴史的起点 それまで世界でいわば常識といえますか、学界の通説となっていた資本主義発展、あるいは市民社会形成史についての見方がございました。それはドイツの歴史学派以来マルクス経済学も含めて世界的な通説となっていた古典理論なのですが、資本主義は貨幣経済なのだから、貨幣経済の発展、あるいは商業の発達、コマースライゼーションの結果として資本主義が現れる、と単純に考えていた。貨幣経済や商業の発展は「人類の歴史とともに古い」存在ですが、そういう古い前期的資本と言われるような営みが拡大し、その延長線上に資本主義が形成されるんだと、コマースライゼーションでキャピタリズムの形成を説明するというのが通説だったのです。けれども、先生はこの通説に疑問を投げられて新しい説明の仕方を提起さ

れた。「人類の歴史とともに古い」前期的商人の営みを含めて、貨幣経済の発達一般が、常に、どこでも資本主義(その基礎をなす産業資本の営み)を生み出したとは限らない。商業の発達が奴隷制を強化したり、市場目当ての封建領主の直営地経営を拡大したことも存在する。西洋近代にみられた資本主義の形成を説明するためには、単なる貨幣経済の発達ではなくて、その貨幣経済のあり方、構造を問う必要があるのではないか。こうして先生は、新しい市場経済、それも中小の農民や職人たち、そういう勤労大衆を担い手とし、そしてまた彼等の所得を購買力の源泉とするような、そうした新しい市場経済の発展、農村工業を基礎にした中産的生産者層の独立自由な発達、そのうちに資本主義形成の基本線を求めるという、小生産者的発展説を提示されたわけです。

近代化の人間の基礎 その際、経済は人間の営みなだから、経済、その歴史をとらえるには、人間生活の基礎をなす経済だけではなく、人間の社会的行動を内面から支えている理念、思想、宗教などの文化領域の重みも十分に考慮しなければなりません。だから、先生は経済史研究にあたっては、「経済史的な余りに経済史的な」立場は「これを超えねばならぬ」ということを早くから、そして生涯、強調されました。「人間類型」への関心、マックス・ヴェーバーが提起した「資本主義の精神」への比較史的な関心こそ、「大塚史学」の核心をなす重要な特徴と言っているのだと思います。近代化の歴史的起点と人間の基礎について、こうした新しい立場を構想して提唱するという事は、大変な挑戦で、しかも、それは経済決定論的な法則史観への批判を意味しますが、大塚先生は直接的にはゾンバルトの克服に自分は血みどろの努力をしたと語っておられました。しかも、そうした世界の通説への批判はまた、ご自分の大学での直接の恩師に対する批判でもあったことを附言しておきます。ともあれ、いま私は「歴史を研究する前に歴史家を研究しなさい」という言葉を思い出しています。大塚文庫の開設は、大塚先生の創造的な問題提起を育てた培養器が何であったかを知るための宝庫が出来たという意味で、また同時に、大塚先生が蒔かれた種を大きく育てる培養器ができるということで、意義深い出来事です。文庫の開設に努力された方々に心からの敬意を表したい思いでございます。

「大塚史学」の現代的意義

比較史の意識と方法 大塚久雄の研究対象は西洋における市民社会の形成史、あるいは資本主義発達史でした。直接的にはそうだったのですけれども、しかし、その場合も、例えば「中産的生産者層」というキー概念にしても、先生自身の言葉によれば、それは確かに「イギリス経済史を分析するための概念手段」ではあるけれども、しかし、先生が「奥深く抱えている問題観からすれば、それはむしろアジア文化、とくに日本文化の自己理解のための概念手段」なのでした。同じように、「前期的資本」「初期独占」「産業資本の社会的系譜」「共同体の基礎理論」「農村工業と局地的市場圏」「小生産者的発展」「近代化と産業化の相関と乖離」「マニファクチャーと問屋制度の対立と関連」「国民経済の産業構造」「貿易国家の諸類型」、あるいは「近代化の人間の基礎」「国民経済の精神的基盤」等々いくつもの新しい概念装置、理論的枠組みがあるわけですが、それは基本的には、先ほど菊池先生からお話もありましたが、

先生が自前で開発し駆使してパラダイムの転換と申しますか、問い方そのものの組み替えにつながられたものでした。それは、当時の日本の「現在」的な問題状況との緊張関係を背景にして、「日本人の目でヨーロッパ[近代社会形成]史を」凝視することによって、逆に「現代」日本の社会や文化を比較史的に理解しようという学術上の試みなのでした。

経済大国と談合的文化

もちろん「大塚史学」が形成された戦前・戦中の暗黒時代と戦後の日本、戦後民主主義以降、とりわけグローバル化の現在では、日本もアジアも世界も大きく変化しています。当然大塚先生の問題意識も広がり、あるいは深められてきています。現実の発展につれて、あるいはそれを先取りして、大塚自身の問題関心が広がってくる、あるいは深められてくる、あるいは質的に新しいものが加わってくるということです。しかし、その場合も、考えてみると、日本は「経済大国」になったが、この経済大国には、同時に「談合的文化」が対になって問題になっている。まさにグローバル化とともに「談合」や「派閥」「人脈」、「過当競争」と「独占」癖、「身内」と「余所者」といった日本の経済や社会の特質がますます浮き彫りになるという一面がある。例えばこのようなことも含めて、現代の中には過去のとげが突き刺さっている。そうした歴史のくびきを抜きにしては現代をとらえきれぬものではないといえると思うのです。

市民社会と現代

そうしたこともあって、欧米では、いま、産業革命以前の中産層と中産層文化への関心が大きくなっています。近代の産業社会によってつくられたミドルクラスではなくて、むしろ近代産業社会を創り出した社会層としてのミドルクラスへの関心、産業革命をつくり出した新しい市場経済の担い手としての社会層、そういう意味での中産層、あるいは中産層文化への関心が最近になって非常に高まりを見せているのです。私どもも3年ほど前に『中産層文化と近代』というささやかな一冊をまとめて、こうした欧米の動向と大塚史学との対話の試みを始めています。いうまでもなくこのテーマはイギリス初期近代をどう描くかという課題を超えて市場経済とそのモラルと申しますか、人間的基礎形成の原点を問うという、そういう意味で今日的な意味を持っているテーマでもあるのです。旧ソ連等、あるいは開発独裁下の新興諸国では、強制的な指令、命令のシステムになじんだ、それだから受け身の大衆が形成され、そのために、ますます上から指令、強制が必要とされてくるという悪循環の中で、人権や市民意識をもち創意と活力に満ちた市場経済の担い手の形成、そういうことが今課題になっている。

経済社会の現代化、国際化に伴って経済摩擦と文化摩擦、したがって市民社会のルールだとか、あるいはグローバル化の倫理が改めて問題になっています。また経済的繁栄と精神的な貧困と申しますか、物質的な豊かさと同時に何か心の貧しさがあって、その間にどういう関係があるのかが現代的な問題として私たちの前に登場してもいます。大塚にとって、そうした近代から現代への移行、それはある意味で形式的合理化の徹底ですけれども、しかし、この形式的合理化の徹底が官僚制的な鉄の檻、そうしたシステム社会の登場に道を開いたにせよ、近代化のプロセス、その歴史的意義は全否定の対象ではなく、未来社会、あるいはあるべき現代社会の中にいわばアウフヘーベンされるといいますか、高められて保存される、昇華された形で保存されるという、そういう意味で

普遍的な理念と捉えられていたように思われます。とくに、大塚が、近代化過程にみられた市民のボランティアな結社であるアソシエーションを「新しい共同体」として重視し、その現代的意義を示唆していることなどは、注目されるべきだと思われます。

「大塚史学」のエッセンス

「最後のエッセンス」は何か さて、先生のお仕事はこのように大変幅が広く深いわけですが、先生は、「難しいことを追及していった最後のエッセンスは、案外、易しいことに落ち着くんじゃないか、そして、そこに行き着くのは、心の素直な人でなくちゃだめじゃないかという気がするんです」と述べられています。この「最後のエッセンス」とは何なのか。これと同じことか、いやちょっと違ったことかとも思いますが、先生は日頃、「学者は簡単な、しかも重要なことをしっかりもってなくちゃ駄目です。そうでないと、学問をやればやるほど駄目になりますよ」と、学問を志すものにとってははらわた(臍物)をえぐられるようなドキッとしたことを、こともなげに言われる困った癖がございました。先生の著書だとか、あるいは授業、お話というようなものでもそうでしたが、それらは、あれもこれも概説ではありません。非常に広い、深い史実の理解、認識の中から、例えば『欧州経済史序説』の場合ですと「近代化の決定的なモメントは何か」という一点に絞り込んで、よけいな枝葉を省くという、概説ではなくて「序説」のスタイルがとられています。先生の学風には、現在との対話という意味での歴史である以上、概説など書きちゃいけない、というか、「ちょっと事情を変えればおまえたちの問題になるんだぞ」といいますか、ムターティス・ムタンディスというんですか、つまり醒めた学問のことだと思っていると、それがいつの間にか生々しい時局論的な発言と二重写しになっているといった突きつけがあります。先生の講義は内容が高度であると同時に分かりやすさといえますか、達意な名講義でした。先生は「講義のコツは適当に忘れることだ」と言われたことがあります。「講義で話をするときには、頭の悪そうな学生を見つけて、その人が頷くように、その人を頷かせるように話をするんだ」とも言われました。著書や論文も、非常に高度なことが書いてあるのですが、しかし、必ずしも難しい文章ではなくて、それなりに理解できるはずですよ。どうぞ、ここにおられる学生の皆さんも「文庫」ができた機会に大塚先生が書かれたもの、あるいは大塚先生が読まれたものから、大切なことを学び取っていただきたいと思えます。

「最後のエッセンス」とは何だったのかということ、脱線してしまいましたが、それについてここで答案を書くことは私にはできません。とりあえず、絶筆となった、それこそ易しい短い文章のメッセージに今は注目しておきたいと思えます。亡くなられる2日前の新聞の「古典礼賛」というコラムですが、このコラムで大塚先生は『ロビンソン・クルーソー漂流記』を取り上げられました。配達された紙面に目を通してご自身で頷いておられたということです。ロビンソン物語は先生の十八番中の十八番で、しばしばお子様たちが小さいときに話して聞かせておられた。大塚家には「ロビンソンごっ

こ」というゲームがあったとも聞いています。この『ロビンソン・クルーソー』、ダニエル・デフォーの作ですが、出版された翌年、1720年には南海泡沫事件で経済が破綻するという出来事があります。バブルがはじけた。ダニエル・デフォーは、このことをまるで予言するように筋書きを作っている。一攫千金の荒稼ぎを夢見る血気さかんな若いロビンソン、お父さんはそれを非常に心配して、「そんな一攫千金の夢のようなことを言って海外でぼろもうけしようというよりは、イギリスの中産層の派手ではないけれども堅実で地道な生き方がいいんだよ」と年中言って聞かせるんですけども、しかし若いロビンソンは親父の言うことなんて聞くどころではなく、逆に反撥して、海外に船出する。そのパチがあたって、と書いてあるんですが、神がそれを罰して難波させ、ロビンソンは孤島に一人漂着する。そこでお父さんの忠告を思い出して新しい建設的で合理的な生活、倫理的で勤勉な中小市民層の生活を孤島で実践するというのが、ロビンソンの物語の筋書きです。大塚先生はそれを紹介されて、短く、この倫理的で勤勉な中産市民層の生活様式こそ「近代の合理的経営の原型」であり、「バブルを追い求めることを拒んだ近代的経営者の魂」があそこにあったと、力をこめて強調されているのです。

《企業や資本主義が倫理的であり続けることは難しいが、倫理を喪失した企業や資本主義は崩壊する》というのが先生の最後のメッセージであったと思うのです。

「理念型」的方法と
リアルな人間理解

ただし、このロビンソン物語については、大塚の考えは欧米の歴史をバラ色に美化して日本をその方向へ導こうとするものだ、といった誤解があります。大塚はこうした批判をあらかじめ予想して、「わが国はイギリス=アメリカでもなくロシアでもない。それどころか西洋ではなくして東洋に属する。しかもその東洋のうちのほかならぬ日本である。いっそう重要なことは、すでに世界史の段階がおのずから異なる」と述べ、ただし、日本的なものを独善的に前提して日本的なゆえに肯定するのではなく、「批判的比較の座標を世界史的規模において正確に設定」することによって、その中で正確に日本の特徴といえるものを、あるいは日本の行く道というものを模索すべきだと、そういうふうに説いておられます。ロビンソンの人間類型というのは、そのための「理念型」であり、それだからまた有効な比較基準になるというのです。

現実の中産的生産者層には、デフォーの『ロビンソン物語』と対比して大塚先生がしばしば語られるのですが、スウィフトの『ガリバー旅行記』が辛辣に皮肉っているように、暗い面というか営利欲と征服欲、そうしたエゴイズムの面がまとわりついていました。大塚はそのことを見逃してはいません。そのうえで、しかし、デフォーが「そういう面には目をつぶって」中産的生産者の「良い面ばかりを」描いている、特にその経営的な素質だとか冷めた合理的な行動様式を前面に押出して、中産的生産者の行動様式の「理念像」、あるいは、あるべき「理想の人間像」を描き出したことに大塚は注目したわけです。現実の中産層は理念型としてのロビンソンの人間類型よりはるかに複雑で多面的な顔を持っている。ときには欲望に流され、投機や談合や利権あさりに走ったり、「怠惰な富者」と呼ばれたジェントルマンの生活様式にあこがれて、これを模倣しようとしたりする。しかし、また、悔い改めて合理的で勤勉な経営と労働の生活に立ち返る。そうしたせめぎ合い、揺れながらの存在であったと思われれます。そういうリアルな人間理解を大塚も重視しています。

バラ色の「期待される人間像」を批判

そのことで一つのエピソードがあります。1965年、そのころ私は大塚先生と同じ東京大学経済学部の教授会のメンバーでしたが、中央教育審議会が「期待される人間像」の中間草案を発表し、これに対して教授会の見解をまとめたことがあります。見解の起草は、当然のこのように大塚教授にお願いすることになり、そのせいで教授会としては珍しく、格調の高い見解ができたのですが、私の手もとに、今、先生の肉筆で書かれたコピーがあります。教授会の資料なので「文庫」にはないと思うんですけども、そこにはこう書かれています。「政府の側からこのような形で理想の人間像を示すということは、倫理の本質に於いて、妥当であるとは思われない。『期待される人間像』はむしろ、日本人一人ひとりの日々の生活を通して、そのなかから生れでてくるようなものでなければならない。」そう釘を刺してから、こう続けられています。「かりに百歩をゆずり『期待される人間像』のようなものを示すことに意義があるとしても、それは、人間性のうちにひそむ暗い面までも見透した、リアルな人間理解の上に立つものでなければならないのではないか。人間性の明るい面のみをもって楽観的に構想された理想像の鑄型の中に、現実の人間を押しこもうとするならば、内面的にも社会的にも悪に抵抗して真に建設的でありうるような強く頼もしい人間の形成という教育効果は期待し得ないばかりでなく、むしろ教育の場に新たな混乱を導き入れることになりかねないのではないか。」

「悔改め」のテーマと「民主主義の民主化」

バラ色の人間像を掲げて日本人もこうあらねばならぬというような号令をかけるということでは駄目だ。それでは人間変革などとはできるはずもないということを強調されているわけです。実際『ロビンソン・クルーソー』もそうでしたが、デフォーの描く世界には「悔い改め」の場面がよく出てきます。一攫千金を夢みて冒険航海に乗り出したロビンソンは、天罰の台風で孤島に漂着し、父の教訓を思い出して悔い改め、地道な中産層の生活に立ち帰りました。そのほか、デフォーにはいろんな小説や戯曲があるのはご存じのとおりですが、その『ロクサナ』とか、あるいは『モール・フランダース』の再婚話にしても「悔い改めのテーマ」というか、「レペンタンス・テーマ」が重要な主題になっています。ですから、デフォーの世界とスウィフトの世界といえますか、合理的な近代市民的な思考・行動様式と、それから冒険主義や高利貸し的な伝統主義的・賤民資本主義、そういう二つの「資本主義」の流動的な転化、相互転化と回生といえますか、悔い改めの現象が年中現実の歴史の中では起こっている。ダニエル・デフォー自身がそういう経歴を生きた人であったように思います。「二股膏薬だ」なんて当時言われていたようですけども、近代的と前期的、二つの資本の「範疇転化」といっていいか、「対抗と絡み合い」といいますか、そういう激動のなかで資本主義が成立し確立する。丸山真男が「永久革命」としてのデモクラシーということ強調される、また、アンソニー・ギデンズが「民主主義の民主化」を課題とする、そうした「近代化過程としての現代」ともいべき歴史の見方の背景にも通じることではないかと思うのです。

近代化と現代 — 西欧「近代」の普遍史的意義を

「現代」的視点から相対化しつつ解明する —

二つの合理性の相剋

ところで、そうしたロビンソンの人間類型というか合理的経済人が作り上げたその近代西欧の経済的合理主義といえますか、これは、ヴェーバーも指摘するのですけれども、「形式的合理性にとどまり、その内部に強烈な実質的非合理性を含んでいる。」ここで、形式合理性というのは目的合理性、高次な目的合理性を意味する概念だと言ってもいいでしょう。つまり諸事象の因果関係をきちんと把握する、それも、数理的に・数学的に明晰に認識するという合理性を意味しています。これによって歴史上、簿記、科学技術、近代法の理論、あるいは近年では設計科学的な思考と実践が誕生しました。全面的な合理化、世界の呪術からの解放があり伝統主義や冒険主義的な非合理性が克服されて、的確な予測と対象の操作可能性、目的達成の効率性が向上する。現代は複雑系社会ということで、つまりそうした予測というものが逆に難しくなるという点もある、そういう複雑な社会が現代と思いますが、しかし、いずれにしても、資本主義文化は形式合理性の力で世界的に拡張して、全人類にとって運命的な意味を持つ存在となっているわけです。しかし反面、ヴェーバー、あるいはヴェーバー＝大塚理論によると、形式合理性の独走はついには社会全体を管理社会の鉄の檻で統括し、そのなかで実質的には分配の不公平とか経済的貧困、また過度な経営化と人間疎外、精神的貧困の問題も生じてくる。この「鉄の檻」と化した形式合理性文化の根底的な非合理性を白日の下に曝すこと、これが現代の課題だと大塚先生は述べています。ヴェーバーは『経済史』の講義のなかで、「形式的合理性と実質合理性との相剋」というか矛盾対立と絡み合い、相剋はキャンプ、戦い、ですが、これを明らかにすることが経済史の課題だと論じています。その意味で、「経済史」にとっては近代化、あるいは現代化、そういう全面的な形式的合理化は、歴史の終焉を意味するのではなくて、正に「歴史の第二幕の幕開け」となるわけです。そして、その課題、形式合理性と実質合理性の相剋という主題は、実際に例えば先進国では経済的繁栄と精神的貧困だとか、あるいは自然と社会の接点におけるバランスの喪失だとか、そういう問題として登場して、それが大塚久雄の注目するところとなっています。

南北問題と「Uターンの論理」

グローバルな規模でみると、最も現代的な課題は「南北問題」です。国際基督教大学(ICU)での大塚ゼミの同窓会は「フライデーの会」というそうです。東大での同窓会はイギリスの独立自営農民にちなんで「ヨーマン会」といいましたが、ICUでの同窓会は、ロビンソン・クルーソーの黒人サーバントにちなんで「フライデーの会」と命名されたのです。ロビンソン・クルーソーの孤島の中でさえ「南北問題」があったということに注目されていたわけで、先生の「南北問題」の重視が窺えます。援助や技術移転はあっても南北の格差は縮まらずむしろ拡大しつつある。その原因としては、確かに従属学派が指摘するように、列強による途上国支配が存在します。中枢の発展が貧富の拡大の重要な原因だということは誤りではありません。しかし低開発問題の核心はそこにはない。むしろそうした帝国主義的な、また、ネオコロニアリズムの支配、あるいはグローバリゼーションの圧力——それらは低開発諸国の経済的な自立と自発的、内発的な発展にとっては、

いわば制限的な要素であるわけで、むしろそうした支配や圧力——という阻止的条件をはねのけて、低開発諸国が経済的な自立と自前の近代化に向かって歩み出す内発的な「Uターンの論理」の構築こそ低開発問題の核心である、というのが大塚先生の考えでした。そして、この「Uターンの論理」を構築するうえで、近代西洋の歴史的経験に学ぶという発想が問題発見の役割を果たすのではないかということが強調されています。更に大塚は、低開発諸国や後進諸国の社会や経済には、従来の社会理論や経済理論、つまりヨーロッパの先進諸国の、しかも多くは近代の経験や事実に基づいて作り上げられている「現代の社会科学の諸理論ではとうてい割り切れない、捉えきれないような深い底がある」と述べ、ヨーロッパ的な文化だけでなく、広く他の非ヨーロッパ的な文化をも込めて正当に理解しうるような「社会科学の一般理論」をどうしても構築しなくてはならない、と説かれているのです。

多文化共存の「一般理論」 ロビンソンの人間類型が歴史上どういう文化的意義を持つかという、大塚によれば、それは一つには、現実の17～18世紀イギリスの歴史の流れの中で近代市民社会を築き上げる担い手の文化という意味を持っている。しかし同時に、社会科学における諸理論が、とりわけ経済学が生まれてくるに際して、理論形成の前提となり認識のモデルとなったのがロビンソンの人間類型なのでした。合理的な「経済人」を前提とすることによって近代の経済学や社会科学が成り立ち得ているわけです。そのことはしかし、現在の経済学、あるいは社会科学の射程にはグローバルにみて大きな限界があるということを意味しています。その限界なり欠陥を補う作業として、「ロビンソンとは違った人間類型を前提としながら、どういうふうにして社会科学の理論、あるいはシステムを組み立てていくことができるか」がこれからの研究課題とならなければならないと、1970年前後に大塚先生は指摘されております。世界史上の多様な文化圏、さまざまな人間類型、その比較文化論的な理解を軸にして旧来の社会科学的理論を相対化し、インターディシプリナリーあるいはトランスディシプリナリーな、学際的・超領域的な総合化による一般理論の形成を模索し始められたのです。そのさい、非ヨーロッパ的な文化圏における人間の行動様式だとか、あるいは西洋でも近代以前の経済史上の諸事実を含めて、これまで「経済学の周辺」に追いやられてきた歴史的経験が新しい理論形成に重要な役割を果たせるはずだ、また果たさなければならない。それだけに歴史家がそういう理論形成の任務を分担しなければならないと考えられていたと思うのです。

経済学の文化的限界 一般理論を必要とするに至ったもう一つの決定的な原因は、「精神的な貧困」という現代的な病理でした。物質的な豊かさに努力を集中してきた経済学の文化的な限界を自覚して、経済という文化領域は他の文化諸領域とどのように関連し広い人間生活の中でどのような位置を占めているかという問題について改めて考察を深めることが求められています。経済に限りません。大塚は現代科学が「理論的専門化」といいますか、研究分野の細分化、タコツボ化におちいって、複雑な現代社会の諸事象、諸病理を把握し対応し切れていないことを指摘して、特定の課題の解決に向けて多くの研究分野が垣根を超えて結集する、テーマ凝集的な「実践的専門化」の重要性を強調されました。ガンならガン、あるいは環境なら環境というようなテーマへの実践的な専門化ですが、そのためにディシプリンとしては学問領域を超えて

総合化していく、その意味では「理論的総合化」、そうした形で超領域型研究様式の開発を提唱されていたわけです。

「日本人の眼」で しかも大塚はこの新しい一般理論の形成に「日本人の眼」が大きな貢献を果たせるはずであり、その努力が「日本の社会科学を作り上げていく」、と強調しています。経済の高度成長を果たしたけれども「心の貧しさ」と資源エネルギー、環境問題を激しく経験した日本、アジアの文化の流れに位置しながら西欧文化を受容し変容した日本人、そういう立場で文化比較を試みる場合、ただ欧米起源の「方法的枠組をもらってきて、それにアジアの対象的事実をつめこんでお返しする」のでは物足りない。欧米の偉い学者がクエスチョネールを用意してきて、それに日本の学者が日本ではこうでしたと答えていくだけでは寂しいんじゃないか。われわれも「方法的枠組を作る、あるいは、作りかえるという仕事に参加」すべきではなかろうか、ということです。談合や派閥・人脈、過当競争と独占癖、身内と余所者、そうした事柄を「すべて背後で一つに繋がり合っているような文化事象としてシステムティックにつかみうるような」一般理論を構築しない限り、経済現象と文化現象、経済摩擦と文化摩擦を「理論的に接合させ、現実役に立たせる」ことはできるはずもない。そういう大塚先生の発想を見ていますと、大塚史学はいったい「日本の現実にとって、つまるところ何を意味しているか」と設問して、「せいぜい、[まだなお]『現代的意味がある』といったていどの平板でぼやけた認識」で応答するのでは、これは内田義彦先生が生前に嘆かれていたことなのですが、それでは到底すまずことはできないんじゃないか、と考えさせられるわけなのです。

未来社会の設計に向けて

近代文化と伝統社会の思惟 こうして大塚は比較文化の立場に立ち異質の文化、あるいは異質の人間類型に対して自由な態度をとり得るような「文化人」が必要だと力説されますが、それと同時に、社会科学は多様な人間類型を「価値批判」することによって理想的な人間像の構築に対してそれなりの寄与をすることができるはずだと論じておられます。そのさい、これは注目すべきだと思うのですが、先生は「一方では『ロビンソンの人間類型』の達成とその帰結を、他方では非ヨーロッパ諸地域における伝統主義的な『共同体的人間類型』の達成とその帰結をつぶさに分析し、それぞれのなかで将来に向かってプラスに働くであろう面とマイナスに働くであろう面とをふるい分け」、それらの諸事実を提供して人々が理想的人間像を構想する材料とすることができる論じているのです。だから、ヴェーバー＝大塚理論の場合、近代市民の倫理・精神はもとより、伝統主義の思考・行動様式でさえもが必ずしも全面的に拒絶、廃棄されるべきものではなくて、プラスの側面があればそれを未来社会の理想的人間像の中にアウフヘーベンしていく、より高められた形で生かしていくということまで考えながら、実質的な合理性の未来世界を構想しようとしています。

「甘え」の現代化 もちろん、近代ヨーロッパ文化の中では抑圧され封じ込められてきた『甘え』の構造、それがはるかに昇華された形で「もう一度現われてくるべきだし、また現われてこざるを得なくなる」と語る場合、「へたをするとも

う一回単なる先祖返りというか、昇華されないままの形で、歴史的に低いレベルで「甘え、あるいは伝統主義的な甘えの意識、甘えの構造が復活してくるといふ「危険もはらまれているが」、その道は絶対に遮断しつつ、そのうえで、「単なる形式的(フォーマル)なものを超えて実質的(マテリアル)なものを復活させるために」「あるべき昇華された姿での『甘え』を復活させる」といふことが重要になるというわけです。現代社会、あるいは未来社会、鉄の檻、そうしたシステム社会としての現代社会に対してカウンターウェイトといひますか、カウンターバランスといひますか、鉄の檻システム社会に対する対重としての役割が「甘え」の構造に期待されている。そうしたものがあつて初めて現代社会は成り立つ、と考えられているといふてよいのではないのでしょうか。

「新しい共同体」
(アソシエーション)

同じことは、「新しい共同体」についての大塚先生の展望のなかにも読みとれます。「『むら』共同体がつぶれてしまったあと…人びとが砂粒のようにバラバラになってしまう、それが共同体の解体であり歴史的に望ましいことだ、などとは私は考えていません。むしろ、日本の現状がそういう方向に動いていることを憂えているのです。」近代化のプロセスにみられたインディヴィデュアライゼーションは、プライバタイゼーション、あるいはアトマイゼーションではなかったという丸山真男の指摘と重なる議論ですが、こう述べて大塚は、「市民社会と民主主義にふさわしい新しい共同体」を提言しています。それは内と外の区別、身内と余所者の差別を持つ村共同体の復活、そういう経済的共同体の系譜を引くものではなくて、さしあたり「宗教的共同体の系譜を引いてその世俗化のなかから生まれてくる『社会的共同体』」を原型とするもので、歴史的にはゼクテが世俗化してクラブを生み、コミュニティをつくりだす、その過程がモデルとされているのです。市民のボランティアな結社としてのアソシエーションが連なるネットワーク型の社会、そういう社会原理が、管理型システム社会の鉄の檻へのカウンターバランスとして求められ構想されている。そうした二つの、システム化とネットワーク化の合成物として現代社会、その未来像が、形式的・実質的な合理性のバランスし合った構造として展望されているのだと思います。

もちろん大塚は具体的な現代社会像、未来社会像を描いているわけではなく、現代社会論・未来社会論の本格的な展開は後進の課題にゆだねられています。ガーベ(成果)として与えられているのではなく、アウフガーベ(課題)として提示されているといふべきなのでしょう。しかし大塚のこうした歴史的な「現代」への鋭い「現在」的関心は「現代(その病理)の超克」を射程におく「超現代」の立場であり、歴史的「現代」に対する「現在」的な批判として大きな意味をもっています。

無知もまた罪 — 大塚久雄の人と学問 —

最後になりましたが、大塚の場合、歴史研究の出発点となった強烈な現在の関心は、その背後に究極的理念、すなわちキリスト教信仰があつて、支えとなっていました。この究極的理念と社会的現実(人間の悲惨の認識)との激しい緊張の意識が根底にあつたのだと思います。学問の奥にあつて学問を超え、あるいは学問自体を支える究極の内面的価値について、ここでは立ち入る余裕はありませんし、また私にはその資格もありません。

せん。ただ、こういう「究極的な理念」を「社会科学の研究」へとつなげていく、そういう契機が、大塚先生の場合、「無知もまた罪」という強烈な責任倫理の立場だということでは確かだと思います。大塚は、「もし現代のキリスト者が、ただひたすら『心情』の世界にのみたてこもるのでなく、この現実の世界の文化状況に責任をもち、したがって『無知』もまた罪であるとの立場に立つならば」、「究極的な価値への『信念』と同時に社会科学的『知識』が必要であり、前者と後者は緊密に結合される必要がある」と説いています。歴史としての現代をとらえる観点だけでなく、昏迷した意味喪失の時代に生きる心構えも遺して旅立たれたのだと思います。

結び — 要旨 —

お配りいただいたパンフレットに「大塚文庫の創設に寄せて」というつたない小文を寄稿させていただきました。それが今日お話ししたことの筋になるかと思っています。

大塚久雄は、日本人の目で欧米市民社会の形成史を凝視し、「近代化」とその「人間的基礎」につき多くの新しい概念装置を開発して、比較史研究におけるパラダイムの転換を促してきた。また、そうした広がりでは社会経済史の研究を進めるには「社会科学の方法」の再検討も必要だったから、早くから「マルクスとヴェーバー」のテーマと取り組んだ。さらに「南北問題」「経済大国と談合的文化」「経済的繁栄と精神的貧困」「自然と社会の接点におけるバランスの喪失」など、現代資本主義が生み出した「形式合理性文化の根底的な非合理性」を解明し克服しようとする問題関心から、ヨーロッパ先進諸国の最盛期の経験や事実にもとづいて形成された社会科学を相対化し、細分化しタコツボ化した学術のあり方を批判して、実践的で総合的な社会科学の「一般理論」を構築することを課題とした。

経済学の文化的限界が問われグローバル化の倫理が問われる現在、大塚の業績とその培養土壌となった貴重な文献・資料類が一室に収蔵・公開されるのは、実に意義深いことだと思います。しかもそれが、大塚が教壇に立った東大や国際基督教大学でなく、地方に立地する福島大学の関係者の識見と熱意、尽力によるというのも特筆に値いすることです。ここで改めて深くこうした文庫の開設に力を尽くされた方々にお礼を申し上げたいと思うのです。内村鑑三は真に「読むべきもの、学ぶべきもの、為すべきこと」は権威ある講壇、つまり文化的な中枢ではなく、「田園より、又は工場より、又は台所より来る」と、文化的な辺境をもつ革新性について述べたことがあります。大塚文庫が21世紀における学術と文化の革新の根拠地になることを夢み、また福島大学が地方の時代、地域の時代の先駆けになることを願って、私の話を終わらせていただきたいと思います。時間を超過しましたが、ご清聴いただき、ありがとうございました。

(富澤) どうも関口先生、長い時間ありがとうございました。

先生の方から質問があるようでしたらいくつか受け付けたいということもございますので、特に学生諸君、非常に刺激的で挑戦的な講義であったわけですがけれども、是非学生諸君の方からこれだけは聞いておきたいという質問等がございましたら出していただきたいと思います。何かございませんか。

福島大学としては大塚文庫をお引き受けするということが非常に厳しい、ある意味では並々ならぬ挑戦を意味しているなどということを実感しております。とりわけ現在、日本の国立大学は大学再編の大波の唯中にあるわけでございます。関口先生がおっしゃったこと、いちいちごもっとも、そういう形でこの大塚文庫がパン種になってくれたらなと思うわけですがけれども、果たして福島大学が今後そうした期待に添うような形で大学再編、全学再編を成し遂げられるかどうか、これはかなりしんどい荷やっかいなことだなとお話を伺いながらそんな感想を持ちました。

ちょっと私個人の問題関心からひとつ質問させていただきたいのですけれども、大塚先生が例えば社会主義についてはどんな評価をされていたのかということ、もしお答え願えるなら教えていただきたい。とりわけ形式合理性と目的合理性が貫徹する現代の社会状況を考えるときに、果たして社会主義の諸理論というものが思想として役立ち得るのかどうか、少し教えていただけませんか。

旧社会主義と市民的変革の課題 (関口) 大塚先生は、そんなに社会主義のことについて語られたことはないし、あまり書かれていることでもないと思います。ただ二つこのことを申し上げたいのですが、一つは、マックス・ヴェーバー、ここに樋口先生がおられますが、ロシアで革命が起こるとヴェーバーはロシア語を学んで新聞を取り寄せ資料を取り寄せて一生懸命勉強した。そして、ヴェーバーは、自分は様々な党派の中ではレーニンのゼクテに現在関心をもっている。ボルシェヴィーキが現在のところ、いちばん問題の核心を提示していると思う。ヴェーバーはこう述べて、しかし、と続けています。しかし、レーニン・ゼクテの決定的な弱点は、労農革命、あるいは労農兵のソヴェート革命ということで、農民と妥協し農民の力で社会主義国家を建設しようとしている。しかし、ロシアの農民はどのような歴史的・社会的性格をもっているのか、ということで、ヴェーバーはこのエス・エル農民が共同体的な、しかも多分にヨーロッパの封建制とはまた違った血縁的・アジア的な性格を持っていることを見逃しませんでした。林道義さんや最近では肥前栄一さんが指摘されているように、ロシア農民の共同体は古い実質的合理性、実質的平等の組織です。だから、反資本主義的な力のエネルギーの源泉としては大いに利用価値があるんだけど、この農民といっしょに、農民に依存して革命をやっていくと、そこで出来上がるのはアジア的な苦役と専制の社会ではないか。自立した個人を前提として、その新しい社会への形成の道として提起されているはずの社会主義変革の理念が、とんでもない古いエジプト的苦役の復権とでもいう形になるのではないか、ということ、ヴェーバーは危惧している。そういうのがヴェーバーのロシア革命論だということ、大塚先生も共感をこめて話されたことがあります。

今日お話したこととの関連では大塚先生は「新しい共同体」と言われた場合に、それが伝統主義的な古い共同体を根っこにした場合にはどのような恐ろしい結果をもたらすのかと、そのこの区別をきちんとした形で問題を立てなければならないということを強調されていたわけで、自立した市民の自発的なアソシエーション型の変革を、先生は未来社会への道として展望されていたのではないのでしょうか。

アソシエーションと消費者社会主義 それから、もう一つは消費者社会主義。今までの社会主義理論は、労働者が団結して労働者・生産者の世界を作っていくということで、生産の側に重きがある。しかし、消費者の立場、消費者としての労働者の立場、勤労民衆の購買力の観点は、未来社会でどのような位置づけをもつべきものなのか。そこで「消費者社会主義」という構想、これはヴェーバーが1918年にオーストリアの将校を前にした講演で提起した問題ですが、大塚先生はこのヴェーバーの考えにも大変関心を示され話をされたことが記憶に残っています。生産は本来消費のためのものであるはずなのに、資本主義社会では、結局は消費のためのものであるはずのこの生産が結局は生産のための生産というようなことになって、消費者がどこかに行ってしまうている。果たして未来社会はこの問題にどう取り組もうとしているのか。消費者不在で資源配分の計画的な設計が可能なのか。成熟した市民社会を土台とした社会主義の建設というとき、「消費者の利益」はどうあるべきなのか。アソシエーション論の立場は、消費者運動と未来社会という問題も視野に入れて構想されるべきなのではないのでしょうか。